

3 週

チームの規範を作成しよう

今週の目標：

- ・ 学習管理システムの使い方を知る
- ・ チームの規範を作成する
- ・ 教育評価の視点を考える(個人課題)
- ・ 学校教育の問題点を考える

講義

(1) 学習管理システムの使い方を知る

>> 02-3-学習管理システムの使い方

この講座は週に1回しかありません。しかし、講義時間外に学ぶためのスケジュールが他の人と一致している必要はないのです。学習管理システムの掲示板や教材ライブラリーは、そうした状況の中での知識創造を支援してくれます。利用方法のルールを決めて、上手に利用しましょう。

演習(2) チームの規範を作成する

>> 02-6-チームの規範を考えよう 03-1-チームの規範をつくろう

先週の個人向けにだされていた宿題「02-6-チームの規範を考える」を他のメンバーに公表し、共通する部分や特徴的なものを整理してチームの規範ロゴを完成させましょう。

提出

「チームの規範をつくろう」 チームで1枚

演習(3) 教育を見る視点を評価する

>> 03-2-授業を設計する 03-3-「初めに学校ありき」と「初めに子どもありき」

03-4-教育を見る視点を評価する

どのような視点から教育を捉え、チームで構想する理想の学校に反映させるのかを決めるために学習します。それぞれの視点の長所や短所について考えましょう。

次週までに

「教育を見る視点を評価する」技術係が Word ファイルを
学習管理システムのレポート提出にアップする

計画管理・技術・記録整理の出番!! 仕事の例

計画管理：誰がいつどこまでやるかの計画案を考える

記録整理：それぞれの課題をまとめる

技術：Word ファイルの体裁を整え、代表で学習管理システムに提出 など

(4) 学校教育の問題点を考える

>> 03-4-学校の課題(個人)

演習(3)で学んだ教育を見る視点を踏まえながら、学校が実際にどのような課題に取り組んでいるかをみていきましょう。文献やインターネットで情報を集める必要がある2つめの項目は来週までに各自で準備をしておき、来週チームの中で発表しましょう。

今後のスケジュール

(学習の見直しをもつためのもので、あくまでも予定です)

3 週目 チームの規範を作成する (本時の講義)

チーム提出: 学習管理システムに「教育を見る視点を評価する」を提出

個人課題: 「学校教育の課題(個人)」

4 週目 他チームがまとめた「教育を見る視点の評価」を参照しながら、自分達のチームで学校教育の課題をまとめて理想の学校の構想の概略を決める

5 週目 ポスターセッション(第1回チーム発表)の準備 各チーム計画を立てて動く

6 週目 ポスターセッション (教室の壁などを利用してチームごとに発表する)

7 週目 ポスターセッションの反省、構想の修正、チーム学習を振り返る、最終レポートのプロットを考える

個人課題: 構想した学校のまとめ(A4で1~2枚=中間レポート)を学習管理システムに提出

8 週目 チーム内で中間レポートの評価 チーム内で構想した学校の認識のズレを確認

9 週目 メインテーマ「多様な学習者の学力を向上させる」(対象教科: 算数と国語)に対して、自分ならどのように取り組むかのサブテーマを各自が考える

個人課題: サブテーマに即した情報を集めて A4 で 1 ~ 2 枚にまとめる

10 週目 チーム内でそれぞれの各自のサブテーマとその論理的な説得性を検討し、代表案を選出する。他のチームへの発表準備

11 週目 第2回チーム発表

12 週目 チーム発表の反省 チーム学習を振り返る、レポート執筆のヒント

冬休み

13 週目 レポート執筆 質問

14 週目 最終レポートの提出 (学習管理システムに個人別で提出)

最終レポートの構成

ワープロソフトにて
A4(1200字設定)10枚以上
(図表の挿入可)

1章: チームで構想した学校

2章: メインテーマを解決するために各自が考えた説得力ある教育方法

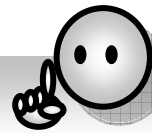
3章: チーム学習について

4章: この講義の感想

自己評価票・公開同意書

このページは白紙です

授業を設計する



内容説明

授業を設計する

わが国での学校教育では、内容が国によって決められており、授業設計といえば指導するための授業案を作成するというのが普通でした。その根拠となる学習指導要領があり、教科書があるので、それを教えることが重視されてきたのです。学校、施設設備、学年制、教科書、教員研修などの学習者にとっての外的条件を整えれば、教育はよくなるだろうと考えています。そこで学校、教室、時間割、教科書などを**教育装置**と呼んでおきましょう。

ところが子どもや地域の実態などを考えて、多様な子どもが積極的に参加する授業を創ろうとすると、子どもの意欲や関心に配慮しながら、教師が主体的に構想しなければなりません。子どもも教師も自分たちの内的条件を整えて、学習する意味(なぜこれを学習するのか)を共有することが大切です。これをここでは**意味の共有**と呼んでおきましょう。

われわれが積極的に学ぶとき、いつも教える人がいるとは限りません。たとえば、陶芸家は土に学び、漁師は海に学び、農夫は自然に学んでいます。このことは土や海や自然が教えているのではなく、陶芸家や漁師や農夫が自分たちで意味を創生しながら学んでいるのです。子どもは自分の身の回りからも学ぶことが期待されており、教師もまた授業から学ぶことが求められています。このような学びをここでは**意味の創生(なすことによって学ぶ意味を実感し、さらに学びたくなる)**と呼んでおきましょう。

少子社会では、すべての子どもがその能力を最大限に発揮できることが期待されています。また、情報社会はつねに新しい知識が生まれる社会ですが、そのことは従来の職業が消滅することの多い社会でもあります。そのような社会では、失業と転職が日常化するので、すでに習得されている知識の量よりも常に学習する意欲と能力をもっていることが大切です。学ぶことの意欲と関心とともに、学ぶための基礎基本の能力が重要です。

設計においてイメージの果たす役割

画家の描く家は空想のままであってよいけれども、建築家の描く家は実現できなければなりません。授業もまた、実現できることを目指して設計されるものですが、そのためには一定の手順をたどる必要があります。

設計とは：まだこの世に実在しないものをイメージして、それを現実に存在するものとして実現していくときの手順を構想し表現することです。

設計するとき最初の出発点になるのは、イメージあるいは設計コンセプトと呼べるようなものです。われわれは授業についてどのようなイメージを描いているのでしょうか。

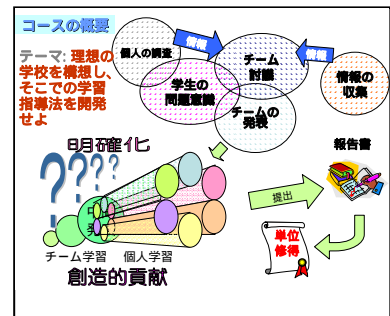
- ・子どもの実態重視か学校組織の重視か
- ・教科内容重視か学習活動重視か

03-3『『初めに学校ありき』と『初めに子どもありき』』参照

何よりも自分の能力で実現できる授業を構想すること、そして次第に高い教育目標の授業を目指して自分の力量を高めていくことが重要です。決して教育愛や子ども中心という言葉に惑わされて、自分の能力を過大に評価しないことです。もし教師が高い教育目標を掲げ、教育愛をもって授業を展開すれば立派な子どもが育つというのであれば、これほど楽な職業はありません。それはちょうど、医師が難病の患者を迎えても、立派な人間愛をもって治療にあたれば、それを治すことができると考えているのと同じです。

イメージには具象的なものと抽象的なものがあります。「授業はオーケストラのようなもの」とか、「授業は相撲のようである」というのは具象的なイメージです。具象的なイメージはスタートでは参考になりますが、修正しにくいという欠点があります。それにたいして線や図形などで表現したものは抽象的なイメージです。たとえばカリキュラムをラセン状や、ピラミッド状などで表現したものがその典型的な例です。

図形や記号を使用したものは慣れないと取り掛かりにくいですが、表現されたものを再構成することも修正することも柔軟にできます。この「教育の技術と方法」を設計するにあたって作成した図は右のようなもので、開発する過程で幾度も修正しています。



教育装置の重視から意味共有あるいは意味創生へ

少子社会では、保護者も子どもの教育にたいしてさまざまに気をくばり、投資もしているので、子ども一人ひとりを大切にしたい教育が望まれています。学習指導要領を守り、教科書に頼って授業を展開すればよいというものではなく、地域社会や子どもの実態を十分に考えながら授業を設計しなければならないのです。とくに子どもが主体的に活動しながら、なおかつ学習が進展し定着していくためには、学ぶことの意味を考えた計画が求められます。確かな学力を育てるためには確かな指導力が必要です。

現在の学校教育では、教師にとって実現できる力量以上の立派な教育目標を掲げていることがあまりにも多いのです。このような事態を避けるためには、子どもをよく観察し、記録し、分析し、解釈するという基礎的訓練が必要です。その上で子どもにとって意味のある学習活動を計画し、その活動を通じて能力が体得されていくような授業を創造することです。国際的な教育比較によるとわが国の子どもの学力は高いが学習意欲がきわめて低いのが実態ですが、これまで教育行政は教育装置の整備を重視してきましたが、その一方で授業者が意味共有や意味創生に十分配慮していない現状です。

「初めに学校ありき」と「初めに子どもありき」 内容説明

江戸幕府から明治政府へと政治体制が一新されたとき、教育もまたそれまでの寺子屋あるいは手習い塾から現在の学校の原型ともなる小学校が設置されました。新政府は明治5年に太政官符を發布して学制を整備しましたが、京都ではそれに先立つ明治2年から上32校と下32校の計64校の番組小学校が設置されて、学区制に基づく近代学校がスタートしました。近代学校は、文明開化の先駆けとして、また欧米の科学技術の導入の担い手としての役割を果たしてきました。また、第二次世界大戦後はわが国の経済復興と科学技術の振興ならびに民主主義の普及に大きな役割を果たしました。

このような状況では、固有な名前をもった一人ひとりの子どもの能力を育成することよりも、成績の平均値や上級学校への進学者数で語られる学校教育として発展してきたといってもよいでしょう。教科内容を効果的に教育することが学校教育のもっとも重要な課題とされてきました。京都市学校歴史博物館(京都市麩屋町松原上がる)を訪れると明治初期の学校がどのようなものであったかを知ることができます。建物や机や実験設備などの施設設備あるいは教科書や教育課程などが展示されています。しかし、その当時の子どもたちの写真から服装や髪型を知ることではできても、残された資料から一人ひとりの子どもがどのように学んだのかをうかがい知ることはできません。わが国の近代教育は「初めに学校ありき」としてスタートしたのです。そして当時の国家中心の教育理念とそれを実現するための教育方法が重視されました。しかし、世界にも誇れる日本の学校がいま転換期にさしかかっています。 [「教育の方法と技術」第3章 56-61 ページ 参照](#)

子ども中心の教育の考え方は決して新しいものではありません。近代教育の初期の実践にもみられるように、ペスタロッチ(Johann Heinrich Pestalozzi, 1746-1827)は貧しい子どもたちを集めて学校を開きました。デューイ(John Dewey, 1859-1952)は子どもが経験していることを重視し、そこから教育を実践し理論化することに努め、最初から教える内容が存在し、それを一方的に教えるという方法を批判しました。わが国でも大正時代には子ども中心の教育が推進され、さらに第二次世界大戦後でも多くすぐれた教育思想や教育実践が行われてきました。現在でもいたるところで優れた教育実践が行なわれています。子ども中心の教育は子どもがしたいようにさせるのではなく、子どもの価値観や認識過程などを十分に理解した上で、教育を綿密に計画し実行することであるので、高度の専門知識が要求されるきわめて専門性の高い教育です。このような力量が今最も求められているのです。

教科書「教育の方法と技術」1章1-29ページ 参照

自由課題

この授業が進む過程で自分の興味関心と時間の余裕をみて、つぎの事項について調べてみよう。その結果をまとめて、自分のチーム名と氏名とファイル名(例：A1-氏名-ファイル名)をつけて教材創庫に掲載しなさい。そうすれば他の人もその知識を活用することができます。

「教育の方法と技術」の第1章にでてくるさまざまな教育思想家の子ども観あるいは教育観について賛同できる考え方と反対の考え方とをとりあげてみよう

自分で読んだ教育あるいは学校に関する書物で他の人に薦めたいものはなんですか

その他、これまでに教育の思想、子どもについての考え方、優れた教育実践をした人の伝記を調べてみよう。

チームメンバーと議論してみよう

学習管理システムの掲示板に自分の意見を自由に書き込んでみよう。また、他の人が書き込んだものに応答してみよう。なお、掲示板がうまく機能するためにはつぎのようなことが大切です。

他人の意見を批判しても非難しないこと。(批判と非難はどう違うか)

自分に関係のある意見や質問にはできるだけ誠意をもって応答すること。

コメントについては感謝の気持ちを忘れないこと。

批判すれども非難せず

われわれは欧米の人達と比較すると議論することが不得意であるといわれています。その原因は、批判することと非難することとがはっきりと区別されていないことにあると考えられます。批判するということは、議論しているときの問題に対して、お互いの考え方が合理的で適切であるかどうかを吟味していく過程であって、議論している人の人格とはまったく関係ありません。問題を論理的に吟味し検討するというのが議論ですから、議論を展開していくときに主張が論理的であることが前提になります。そのために相手の主張の非論理的なところを批判しても、相手の人格を否定してはなりません。あくまでも主張が論理的に展開されているかどうかの問題になります。非難と批判は辞書ではどのように説明されているでしょうか。広辞苑ではつぎのように説明されています。

非難：欠点・過失などを責めとがめること。非として難ずること。

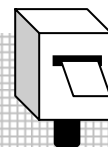
批判： 批評し、判定すること。

人物・行為・判断・学説・作品などの価値・能力・正当性・妥当性などを評価・検討すること。否定的内容をもつものをいう場合が多い。

事物を分析してその各々の意味・価値を認め、全体の意味との関係を明らかにし、その存在の論理的基礎を明らかにすること。

とくにわれわれが共通する問題を吟味しているときは、批判の の意味が重要です。批判というのは「物事の論理的基礎」をお互いの議論を通じて明らかにしていく過程であるといえるでしょう。

教育を見る視点を評価する



提出

さまざまな情報と異なる意見

多くの人々が学校教育の成果に期待しているのですが、その期待にはさまざまなものがあり、評価の視点を単一化することは困難です。しかし、現在のわが国の学校教育はこの視点についての問い直しに迫られているのです。先にも述べた教育装置としての学校は充実してきているのですが、学習の意味という点ではこれまでの学校教育が期待してきた子ども像と、子どもや教師さらには保護者の期待する子ども像との共通基盤があまりにももろいものになっています。そこで教科書「教育の方法と技術」の第1章から、第2章のフリースクールの事例、第3章の第1節までの内容を分担して読んでつぎの課題に取り組み、学習成果を Word ファイルに編集して提出しなさい。そのときに、

Word ファイル名にチーム名をつけて、代表として技術係が学習管理システムの「レポート」に提出しなさい。

Word の編集フォーム例

チーム番号() メンバー()

教育をみる視点の課題1 >> 「教育の方法と技術」参照

子ども中心主義と教師中心主義ということがよく言われますが、それはどのような意味で使われていますか。それぞれの主張の長所と短所を列挙しなさい。

子ども中心主義とは

教師中心主義とは

子ども中心主義の長所と短所

教師中心主義の長所と短所

どのようなときに子ども中心主義をとり、どのようなときに教師中心主義をとればよいだろうか

課題2 >> 資料「授業を設計する」参照

学校教育を教育装置と学ぶ意味の視点から評価したとき、それぞれの視点に対してどのような対応をすればいいでしょうか。

教育装置(学校、教室などの外的要因なもの)の視点から教育を充実する

問 このような視点にはどのような利点と欠点があるか

意味の共有(指導者と学習者が「なぜ学ぶのか」を共有する)や意味の創生(主体的に「なぜ学ぶのか」を発見する)の視点から教育を充実する

問 意味(なぜ学ぶのか)重視の視点にはどのような利点と欠点があるか

と の両者のバランスをとるためにはどのような配慮が必要か

このページは白紙です

